OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 永井荷風『花瓶』論 : 「花瓶」の意義と虚構の現実化 |
| Author(s) | アブラル, バスィル |
| Citation | 阪大近代文学研究. 2019, 17, p. 93-104 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/71758 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 永井荷風『花瓶』論
## ――「花瓶」の意義と虚構の現実化――

アブラル・バスィル

### 一、「花瓶」の象徴性と本論のアプローチ

『花瓶』は一九一六年一月号と二月号の『三田文学』に発表され、後に、一九一八年一月に『支那人』（『文明』）と『うぐひす』（『文明』）とともに、籾山書店が出版した『断腸亭雑稿』の附録として刊行される。『花瓶』は、荷風が慶應義塾での教職とともに、「三田文学」の編集長も辞め、私生活においても二人目の妻であった八重次に離婚された波乱万丈な一時期を終えた時点で発表されている。一方で、本作よりわずか数ヶ月後に、荷風の大正時代の代表作とされている『腕くらべ』が発表されはじめる。作者荷風の実生活の様々な出来事に加えて、『腕くらべ』との間に見られる語りの手法の類似等もあって、『花瓶』は従来『腕くらべ』出現の前兆として位置づけられてきた。研究史において、吉田精一[1]は、『花瓶』が発表された時期の荷風の人生の出来事を小説のプロットや人物造形と関連付け、「花瓶の絵を完成するところは、あたかも「腕くらべ」の出現を示唆する」ものであるとして、はじめて『腕くらべ』との関係を指摘している。後に、坂上博一[2]は「花瓶」そのものについて「政吉夫婦の優しい情愛の象徴」という認識を示している。坂上はまた自身の家庭の不和による悩みを政吉夫婦の愛情の象徴である「花瓶」の絵の創作によって慰めていく燕雨の態度から「結婚生活の破壊を代償することによって購いえられた」、「芸術の勝利」を読み取る。坂上は、「花瓶」の絵の完成が『腕くらべ』の前兆であるという吉田の認識に賛同しながら、燕雨の右のような有様に荷風の芸術家としての主張を見出していく。

なお、近年の研究において、佐藤麻衣[3]は『花瓶』を『腕くらべ』の習作としてだけではなく、「一つの独立した芸術家小説としても読むことができる」と主張している。佐藤は燕雨の画歴を詳しく分析して見せるが、吉田や坂上と同様に「恋の形見の花瓶」というイメージをそのまま受け継い

でいる。佐藤はまた、燕雨の画歴と美術史を荷風の作家活動と対照しながら本作に含まれている荷風の芸術に対する批評的な姿勢を評価している。中野真理[4]は本作に描かれている物語を他の荷風作品にも度々描かれている「芸術的空間の中に自身の生きる場所を見出」している男たちの物語と見做し、それを荷風本人の生き様と一致させている。中野はまた、「花瓶」の絵が、その物語の基調となる「悲哀の感情を視覚化した」ものだと指摘している。

ここで注目したいことは、表現こそ違っていても、「花瓶」を〈政吉夫婦の愛の形見〉とみなしている点で各論の認識は共通している点である。これと同様に、燕雨が「花瓶」の絵を完成させたことによって、何らかの形で〈成功〉しているのだ（坂上の言葉を借りると、「花瓶」の絵の完成は燕雨に取って、ひいては荷風に取っての「勝利」なのだ）という解釈も各論の共通認識であると言える。しかし、果たしてこのような認識を立証することができるのか。ひとまず作品の本文から、「花瓶」は政吉夫婦の「恋の形見」として評価されている箇所を引いて見よう。

日頃の悲しい淋しい感情を慰めるには、政吉とお房との暖かい恋の形見なるこの花瓶の図の制作に身魂を傾注するのが一番意味もあり又一番適當した事であらう（略）花瓶の下図を見ると共に燕雨は忽ち旅のことも忘れてしまつて独りぢつと思ひを此の事に移した。

しかし、唯一「花瓶」を「恋の形見」と評価するこの箇所の記述では、燕雨に内的焦点化されている語りが、「花瓶」の由来を政吉に聞かされて受けた印象を燕雨の言葉として述べているに過ぎないのである。つまり〈政吉夫婦の愛の形見である花瓶〉、という捉え方は、燕雨の（ひいては政吉の）考え方を重視した解釈であると言える。

あえて「花瓶」を政吉とお房の愛情の象徴とする解釈を問題視する理由は、特に物語の前半において強調されているお房の困惑した内面の描写に関わる記述にある。お房はなぜ「花瓶」の面影に悩まされているのか。もし「花瓶」が、お房と政吉の「恋の形見」だけを意味するのであれば、夫にそのことを言われる度に「泣きたいやうな消えも入りたいやうな心持がして全く何と云つていゝか返事に窮してしまふ」お房の態度は不自然であろう。勿論義理の母と夫婦の不仲はお房の悩みに影響しているだろうが、それは「花瓶」とどのように関係しているのかがあいまいである。物語の現在において政吉夫婦にとって「花瓶」そのものがどのような役割を果たしているかを理解するために、改めて小説のプロットを分析する必要があると思われる。この作業でカギとなるものは、小説の前半において描かれている政吉とお房の過去の経歴である。「花瓶」は、二人の経歴を時間軸に沿って再整理できる道しるべであり、政吉とお房の内面を窺わせる機能もある。

一方で、政吉夫婦の過去の物語と現在の境遇の実状は、燕

雨の現状の理解にも欠かせないのである。『花瓶』の後半において、家庭の問題に悩まされる反面、数年来自分が満足できるような作品も描けていない燕雨が「花瓶」の絵の創作に取り掛かっていく過程が述べられている。燕雨は己の家庭との比較対照で、政吉夫婦の生活を「平和幸福」なものであると述べている。このような考え方の下で、燕雨は二人の「恋の形見」である「花瓶」の絵の創作をはじめている。しかも、燕雨は出来上がった絵を自身の「一世一代の傑作」と評価し、芸術創作の枯渇期からの脱出に〈成功〉するのである。しかし燕雨のこのような〈成功〉論を客観的に証明することは難しい。本論で試みる政吉家の事情を見直すことは、むしろ家庭の不和を梃にして、長年煩ってきた芸術活動の低迷から脱却しようとする燕雨の内心を浮き彫りにしてくれる。

　従来の研究において、『花瓶』は主にその男主人公たちである政吉と燕雨の物語として読まれ、二人の人物造形に荷風の分身としての要素が注視されてきた。しかし、前述したお房の煩悶を視野に入れることによって、本作の複雑なプロットが見えてくるはずであるだけではなく、政吉とお房の関係と、燕雨の心理の動きを捉え直す新たな手掛かりも見えて来る。次節ではまずお房と政吉の過去の物語の欠片を時間軸に沿って再編してみる。

## 二、『花瓶』の時間とお房の「仕合せ」

『花瓶』では、小説の早い段階で語り手によって「花瓶」の由来が説明される。その前に留意すべき点は前述した、お房が政吉に「花瓶」のことを言われる度に困惑してしまうということである。なぜお房はこのように「花瓶」の面影に悩まされているのか。この問いを念頭におきながら、以下に「花瓶」の由来と彼女と政吉の過去を確認しておく。

　十年前、政吉は「小房をば代地の妾宅へ囲つた時、二人連れで手廻りの道具を買ひ」に行った時、「万事傷心在目前。一身憔悴對花眠」という詩が刻まれた「花瓶」が気に入り、それを買ってしまう。それから「三年ほどして」、「政吉の父が急病で世を去」った後「或日久振で妾宅へ遊びに来た政吉がそれなりその日の夕方から発熱して寝ついてしま」う。「政吉の病中全一月ばかりの間お房は夜の目も眠らぬ介抱其の他萬事の立働き」を見せたので、「それをば政吉の母親が人傳に聞傳へて、それ程實意のある女ならばと、こゝに目出度い話の糸口が開け、いよ〳〵政吉が床上げする日に、お房は妾宅をたゝんで其儘政吉の本宅へお伴をするといふ事にな」る。その後、二人にとって「尊い宝となつて」いる「花瓶」は「政吉が家の土蔵の中へしまひ込まれた」が「一夜盗賊が土蔵へ忍び込んで」、「かの花瓶も共に紛失してしま」う。

　このように、第一章では早いテンポで過去の出来事が語ら

れていく。しかしここで語られていることが当時の二人のすべてではない。政吉とお房との結婚の前後に起きていたことを正確に把握するためには、次の第三章の本文も視野に入れなければならない。

　母親は政吉が父の亡くなつた後（略）職業を捨て何にもせずにぶら〲遊んで暮す其の非を責めた。それのみならず母は又政吉に向つて、藝者をしたお房をば私一図の量見で、堅いお父さんのなくなつた後、この家へ入れるやうにしたのは、つまり政吉の心を察してやつた親の情であるのに、それをも知らぬ顔に母へは一言の断りもなく、大事な立身の道を捨てゝしまつた事をくど〲と怨んだ。（略）それ以来母と政吉との間には何ともつかぬ隔てが出来た。

　第一章と第三章で交錯した形で描かれている政吉とお房の結婚前後の出来事を時間軸に沿って再整理してみると、政吉がお房と結婚してから辞職していることが明らかになる。また、政吉は働いていた会社と政府高官の関係に気付いたから辞職せざるを得なくなったわけであるが、そうした事情を知った時点は、彼が一ヶ月間も病床についていた時期と、ちょうど重なっていることも分かる。むろん、物語は会社のことなど何も知らない母親が政吉の放蕩ぶりから息子の心中を理解したつもりでお房との結婚を許してやる、という展開となっている。しかし結婚後、無言のまま辞職してしまう政吉の態度は母の不満を募らせてしまうのである。

　従来の研究で見落とされてきた政吉の結婚と辞職の関係は、政吉だけではなくお房の内面や夫婦の関係を読み解く上でも欠かせない情報である。まず注目すべきは、お房も政吉の母親と同様に実際に政吉の辞職の理由を知らされていない、ということである。その結果、彼女は政吉とその母親の不愉快な関係はむしろ「藝者をした自分がゐる為」だと思い悩むことさえある。お房のこのような思いはすべて勘違いであると言い切れない。政吉の母親は息子の辞職後「女主も同様に裏の本屋に住つて」、「政吉の家の目下の状態はまるで妹婿の松坂が後を継いだやうなもので政吉は嫡子でありながら全然あてがひ扶持の厄介ものとしか思われな」くなっている。しかも、政吉の母親が「くど〲」とお房の芸者としての経歴を意識して息子を責めている事実も合わせて考えると、やはりお房が自分を政吉にとっての「引け目」であると考え込んでいることはそれなりに道理にかなっているといえる。

　お房自身の言葉によれば、政吉の妾宅にいた当時、「一生の望」が叶えられて、彼女は幸せだった。結婚後もまた「一生の望が叶つて朝夕に心を尽して良人に事へるといふ外何一ツ変わつた事もない仕合な身」である。そもそもお房が夫の気を引いた「花瓶」に刻まれている漢詩のことや政吉の当時の気持ちを知っていたことは想定しがたいので、それまでにお房にとって「花瓶」は自身の「仕合せ」の象徴であったと

言って過言ではない。ただし、結婚後、政吉が出世の道を捨て、義母との仲が悪くなっていたことには、元芸者である自分の存在が影響しているのではないかと、お房は懸念している。それにつれて、彼女にとっての「花瓶」のイメージも変化していったと推測できる。注目すべきはお房が政吉の本宅に移ったちょうど同じ年に、「花瓶」もなくなっていることである。お房は「花瓶」をなくしてしまったと同時に、不幸に陥ったと言わないまでも、その「仕合せ」が陰り始めたのである。

夫に「花瓶」のことを言われる度に困惑するお房の振舞いから、むしろ過ぎ去っている「仕合せ」と、既に無くしてしまっている「花瓶」が呼応して意識されている彼女の内面を読み取ることができる。作中、お房は政吉の妾だった時から〈政吉と住みたい〉といった内容の言葉を度々口に出している。もともと「花瓶」はまさにその願いが叶った象徴だったのである。しかし、「花瓶」の絵に直面した時に、寧ろお佐喜の家出をわがことのように心配しているところを見ると、お房にとって「花瓶」の意義は時間の経過につれて変化していることがわかる。

一方で、お房は義理の母との不和だけではなく、政吉とのディスコミュニケーションにもその将来を脅かされているといえる。「お房はさう云ふ事を話し出して一言の下に叱りつけられた事も度々なのである」とあるように、政吉はお房のこうした悩みに耳を貸すことはない。燕雨夫婦とは対照的に仲睦まじく見える二人であるが、実は作品には政吉とお房のディスコミュニケーションがしばしば描かれている。たとえば、二人が墓参りに行った日に、お房が「外に何も望みはない」と言って〈子供がほしい〉と持ち掛けた相談を政吉は聞き流す場面がある。同じ日の出来事として、政吉が燕雨とその妻の関係について持論を解説した後、「私とあなたはどうなんでせう。違つてゐるんかしら。」と不安げにこぼしたお房の言葉は〈電車が来た〉という偶然の出来事で宙吊りになってしまう。二人はその後燕雨を訪れるが、完成した「花瓶」の絵を前にして、またもや通い合わない夫婦の内面が示されている。お房は燕雨夫妻の関係を「わがことのやうに深い吐息を漏ら」して聞いているものの、夫の政吉は「花瓶の作にばかり見惚れて」お房のふるまいに無関心である。そもそも、政吉はお房の悩みが由来している我が家の事情を「つまらない家事の紛々」と一蹴して、自分の優雅な趣味の世界に没頭しているのみであるが、そこに到達するまでの政吉の内面も見ておく必要がある。

## 三、「花瓶」の意義——政吉の場合

政吉が燕雨の描き上げた「花瓶」の絵に満足していることは議論を俟たないだろう。彼は自分の探し求めていたものを「花瓶」の絵から見出せたのだといえる。では現在の政吉に

とって、「花瓶」はどういう意義を持っているのか。第一章では、政吉が実際に「花瓶」を買った理由について以下のような記述がある。

　唐草模様の間に「万事傷心在目前。一身憔悴對花眠」と云ふ十四字を読み得たのが、其の一刹那深く政吉の心を動かしたのであつた。政吉は花瓶に染付けた万事傷心の十四字が宛ら小房に対するする自分の身の行末を占ふものゝやうな気がして、何といふ訳ともなく一味の哀愁に襲はれたのである。何故といふに、政吉は堅い家柄の然も総領に生まれた身分や何や彼やを思ふと、いかほど小房が誠を盡してくれたにした処で、其の誠を受入れて末長く女房にして添ひ遂げると云ふ訳には行くまい。

　政吉はお房と一緒になれない我が身を思い、その愛の切なさを言語化した如き詩を発見したことで「花瓶」を購入するに至る。この段階では、「花瓶」は政吉にとって、自身のお房に対する愛情の象徴だと言っても差し支えはないだろう。これより三年ほどして政吉は会社の事情に気付き、辞職せざるを得なくなる。前述のように、ちょうどその時期に彼は一ヶ月間も妾宅に倒れ込んでしまうことがある。政吉が倒れている間に「花瓶」は常に彼の病床の近くにあったわけで、そのイメージが「己れの看病にのみ面痩れしたお房の姿と相伴つて、今だに折々政吉の目に浮かんで来る」という記述がある。ただし現在まで長引いているこの「花瓶」のイメージは、先ほどの政吉のお房に対する未練がましい愛情の象徴としてのそれとは同じものだといえない。

　改めて前節にも触れた二人の関係を政吉の側から見ると、そもそも政吉はお房との結婚は「夢にも思つて居なかつた」のである。当時、政吉のお房に対する感情とは先の引用文にある通り、「一味の哀愁」を浴びた悲恋の甘味のようなもので、彼は「花瓶」もまさにそうした感情を表現したものとして購入している。しかし、政吉に悲恋の情を感受させた事情と正反対に、二人が結婚していくのである。しかも、「花瓶」の絵から、最初に政吉の目を引いた漢詩が欠落しているのに、政吉は「決して非の打ち処はない」と燕雨の作品を絶賛している経緯を見ると、すでに漢詩が刻まれた「花瓶」、ひいては自身の未練がましい愛情などは、彼の探し求めるものではないことが分かる。

　政吉にとってお房との結婚、そして会社の事情をめぐるその退職という展開は一種の取引のようなもので、「花瓶」がその取引の正当性を裏付ける証拠になっていると考えられる。取引では、政吉が出世の道を捨てさせられた代りに、尽力してくれる女と優雅に暮らすことができた。ちょうど会社の事情から病床にあった真最中、言い換えれば、くだんの取引が成立しつつある時期に、政吉の目に焼き付かれたものは、自分の看病をしているお房の愛情とそして「花瓶」である。改めて詳細に述べるが、政吉が燕雨に聞かせた「花瓶」の話が

燕雨に二人の「恋の形見」というイメージを持たせたといえる。つまり政吉は「花瓶」をお房との愛情が実って二人が優雅に暮らし始めた原点にあったものとして思い描いていると推測できる。

　政吉はお房との暮らしで反俗ともいえる姿勢を見せている。夫婦の住む家は「朱泥の急須」、「法帖画帖」、「筆筒墨池筆洗」等、主の趣味を見せるものに溢れかえって、政吉本人も常に絵画の鑑賞や習字、文芸談等々にふけっているようである。それだけではなく、第四章にある燕雨との会話の所々に古いものを懐かしく思う反面、「今の人」や「今日」の世の中を好ましくないものとする政吉の発言が見られる。また、妹夫婦の悪口を述べている際に、彼らは「あゝ云ふ風でなくつちや立身出世はできん」と皮肉な言葉を口にしていることも見逃せない。更に政吉は、現在のお房との三十代からの隠居同様の暮らしに自分の幸福までも見出している。

> （政吉が）椎の木立深い崖の上の離座敷にお房と二人閑静に暮らしてゐるのを無上の幸福と信じてゐるので、つまらない家事の紛々を根に持つて番町の夫婦を嫌うのでは決してない。唯二人が夫婦揃ひも揃つて如何にも当世風な意気揚々とした姿を目に見ると、或時は丁度壮士芝居の舞台に出て来る新郎新婦そのまゝの様子に、折角世間を離れて心静に暮してゐるこの隠家の幽雅な気味が、其為に滅茶々々に掻乱されてしまふやうに思われてならないからである。

　しかし政吉が「信じてゐる」という「幸福」は、額面通りには受け取れない。右の引用文において、政吉は妹夫婦を軽蔑している箇所もあるが、会社の特別な事情で辞職せざるを得なくなるまで、実は政吉本人が「如何にも当世風」な人間にほかならなかったと思われる。お房との結婚でさえ政吉自身が選んだわけではなくて、「気の弱い処があつてはたから其程までに云つて呉れるものを無気に言退ける勇気もな」かったから実現されたに過ぎない。言い換えれば、彼は自ら立身出世の道を捨て隠居同様な生活を選んだわけでは決してなく、今の「幸福」な暮らしも一連の出来事の結果として得られたものである。

　政吉は自分の歩んでいた道が閉ざされ、エリートとして出世する将来が奪われたときに、己の不幸を嘆くことはない。むしろ、自身のそれまでの生き方を否定し、軽蔑することで理不尽な運命を乗り越えようとしているのである。このように考えると政吉がいまだに思いうかべる「花瓶」とは、立身出世を捨てざるを得なかった己の人生を、面痩れするほど心をつくしてくれる女と過ごせる「無上の幸福」として意味づけ直す上で欠かせない根拠であると理解される。

　なお、『花瓶』では政吉の右のような生き方は燕雨との関係において強調され、前景化されていると思われる。しかも物語では、燕雨が自分の家庭のこと以外に政吉家の状況を語

る箇所もある。このために、政吉家についての情報を分析する際に燕雨自身の主観による記述の背景を分析する必要がある半面、彼のそうした発言を相対化する手掛かりも探すべきである。次節ではまず燕雨の人物造形に注目し、彼の〈物語〉に光を当てる。

## 四、自己劇化の精神——燕雨の葛藤と選択

『花瓶』の後半では物語の焦点は燕雨の側に移行し、彼の画家としての履歴とともに、燕雨家の不和についても語られている。ところが、燕雨夫妻の不仲はすでに燕雨が政吉の家を訪れる場面から仄めかされている。

> 其の後姿を見る氣もなく見送ると、燕雨は我にもあらず己が家の住憂い事と政吉の家の平和幸福な事とを思比べ、女一人の爲にかうまで家の様子が違ふものかと不思議にもなるのであつた。

政吉の家庭が必ずしもそうした平和幸福を体現していないことはここまで論じてきた通りであり、この認識は燕雨の主観に過ないのである。いずれにしても燕雨は家庭の問題の外、芸術上の問題も抱えている。次の本文引用は燕雨の芸術創作の悩みが語られる箇所だが、その直前に彼の心境についても言及がなされていることに注目すべきである。

> 酒がにがい。世の中が面白くない。女房が気に入らぬ。燕雨は近頃のさめ果てた心からつい昨日までの旧作を見ると、何とも云へない衒気満々たる厭味を覚え出来る事なら他人に買取られたものまで皆一束にして焼捨ててしまひたいと思ひながら、さりとて今のところ自分の心に叶ふやうな画風を発見する事も出来得ずに居るのである。

ここで特記したいことは、燕雨がいかに家庭の問題を自らの芸術活動と結びつけて考えているかということである。燕雨にとって、お佐喜との間に別れ話が出る度に「別離の悲劇は直にわが藝術の一大進歩のやう」に思われるなどとされている記述も同じ心理を強調している。このような燕雨の言葉から、あたかも自身の置かれている境遇を劇化している彼の態度が浮かび上がるのではないだろうか。燕雨が「花瓶」の絵の制作を決める過程において、同じプロセスが露骨に表面化しているので、右のような燕雨の態度もよりはっきり窺える。

政吉の家から帰った燕雨は、自分の不始末の噂話を新聞記事で読んだ妻のお佐喜に叱られる。お佐喜と口喧嘩をしたその翌日に、燕雨は「女房よりも家よりも画工には絵が一番大事なのだ」と自分に言い聞かせて、旅行に出ようとその準備にかかる。旅に必要なものを集めると、突然箪笥の引き出しにあった「花瓶」の下絵が目に入る。ここで途端に状況が変わり、「家の事や女房の事なぞに気をくさらすのは美術家として大いに間違って」いると考えていた燕雨が、「花瓶」の下絵の出現により、家庭の問題を創作の動機として利用して

することとなっていく。

> 燕雨は実物の花瓶を見た事はない。唯其の深い来歴を聞いたまでの事であるが、まことに情愛の深い優しい心持がした（略―燕雨が）日頃の悲しい淋しい感情を慰めるには、政吉とお房との暖かい恋の形見なるこの花瓶の図の制作に身魂を傾注するのが一番意味もあり又一番適当した事であらう。

両家庭の比較対象を行った上で、主観的に見出した政吉夫婦の恋によって、自身の淋しい心持を慰めることを「一番意味もあり又一番適當した事」だと決めつけることは、自分の境遇をドラマ化している燕雨の精神をよく表している。また、燕雨自身が己の心の動きとその結果として出来上がる「花瓶」の絵について次のように述べている箇所も要注意である。

> この絵なぞも、まアどうやらかうやら自分だけ満足するやうに描けたのも、全く家庭の不和だつたおかげですからな。（略）私はどうかしてこの淋しい心持を、この花瓶の制作によつて慰めやうと思立つたのです。

燕雨は政吉に向って自分が描いた「花瓶」の絵を「一世一代傑作」として評価する記述もある。前述したように、燕雨のこの発言のもとで「花瓶」の創作は成功したのだという従来の研究の共通認識が形成されたと思われる。むろん画の知識にたけている政吉の評価もあるから、「花瓶」の絵を失敗作とするだけの情報は見当たらない。しかし数年間満足できる絵が描けなかった上に、自身の旧作さえ罵っている燕雨はなぜ「花瓶」の絵を「一世一代の傑作」と評価できるのか。この評価は自身の境遇をドラマ化してきたことに影響されていると考えられる。

燕雨は「花瓶」を政吉夫婦の「暖かい恋の形見」として捉え、そこではじめて「花瓶」の創作に踏み切っている。しかし本論の第二節と第三節で論じたとおり、こうした捉え方は政吉夫婦の認識と大きく異なるものだと言わざるを得ない。燕雨は「実物の花瓶を見た事はない」から、彼にとって「花瓶」とは実態のない観念的なものに過ぎない。「花瓶」の絵から漢詩が抜けているところを見れば、政吉は実物の「花瓶」よりも、自分の求めている「花瓶」のイメージを燕雨に語り聞かせたのだと推測できる。その政吉の思い描く「花瓶」のイメージがさらに「己が家の住憂ひ事」を「政吉の家の平和幸福」と対照的に捉える燕雨自身の思い込みによる枠組みにはまり、自分の悩みを慰めてくれる「花瓶」の絵が生まれてくるのである。

燕雨はもともと「自分だけで見ていつまでも見飽きのしないやうなもの」を探し求めていたことを忘れてはならない。そこで見てきたように「花瓶」の絵の制作において、燕雨の実生活の問題と芸術創作の悩みが溶け込む形となり、絵が完成する前から、「一番意味もあり又一番適当した事」だと本人が言っているように、燕雨は事前に「花瓶」の制作に納得

できるような内面の枠組みを獲得している。

「花瓶」の創作に取り掛かる燕雨の心持は彼自身に内的焦点化されて次のように述べられている。

> 胸に潜んだ人情は不幸にして性質の合わない妻の身に灑ぐ事が出来ない、其代りそれは他に轉じて親しい友達夫婦の身の上とその人達から頼まれた制作の上に灑ぎ込まれるのだ。

さらに政吉に対する、「私はどうかしてこの淋しい心持を、この花瓶の制作によつて慰めやうと思立つたのです」という発言からも彼の内心をのぞき知ることができる。燕雨は己の境遇の不幸から芸術上の躍進をはかるという心理を見せ、自己劇化の末「花瓶」に家庭の問題で悩まされている自分の淋しい心持を慰めてくれるような意義を持たせている。一方、燕雨がお佐喜の家出について「打捨て置けばそのうち帰るだらう」とのんきに言っていられることは、彼が現実の劇化によって自分の中の虚構を現実化しているのみならず、己の行為を正当化する認識も獲得していることを示している。

## 五、燕雨と政吉

### ――「画中の景」に発見される「幸福」

本稿の冒頭部に引用した論文において、吉田精一は政吉と燕雨の人物造形について「自己の性格を二分化して、一は趣味に生きる若隠居の、無職同然の政吉に、一は芸術家肌の放逸な画家燕雨としている」作者荷風の思惑を指摘している。作中、政吉の世捨て人のようなふるまいや高尚な趣味等は荷風のそれと一致しているように見えている。また、政吉の妹夫婦に対する皮肉な言葉、あるいは燕雨との会話に見られる文言にも典型的な荷風の批評[5]の仕方が秘められているといえる。他方、燕雨の家庭の問題や創作上の行き詰まりは、当時の荷風を思わせる面があることも否めない。吉田に限らず、荷風の分身としての二人の位置づけは従来『花瓶』の読解の中軸をなしている[6]。しかしこのような捉え方は決して政吉と燕雨の置かれている状況を充分に分析したものではない。

ここで注目したいことは、政吉と燕雨の特別な関係である。まず燕雨の方からこの関係を見ておこう。物語の後半部において燕雨の性格は次のように描写される。

> 一体燕雨は何事によらず人の性行を批評したり干渉したり意見したりする事が大嫌ひである。（略）友人に対しても互に意気相投ずれば喜んで語る。若し意気相合はざれば黙して去ると云ふ風で、決して人と争った事がない。争ふ必要が更にないのである。

このような性質を持ち合わせている燕雨は、政吉の「沈着篤実な人品」を認め、彼と「骨肉兄弟にも優つて更に深」い関係を維持している。むろん二人の関係の背景に第三章に説明される、政吉夫婦から受けた恩恵に対する燕雨の感謝の気

持ちも潜んでいるだろう。一方で、ここにも燕雨の現実の虚構化ともいえる性質が現れている。燕雨は「政吉の家をば全く口に出して云ふ通り世にもなつかしく麗しい処」と考え、「金で買へない宝」であり「何から何まで全く画中の景」であると、その優雅な雰囲気を称賛している。燕雨の羨望の目は政吉の家の物理的な側面だけではなく、そこにある（少なくとも燕雨はそう思い込んでいる）夫婦の「平和幸福」な暮らしにも向けられている。このような政吉家の有様は燕雨の思い込みだと言え、彼に自身の「不幸」を相対化させる手段を与え、結果的に「花瓶」の絵の創作を可能にしてくれるのである。絵の背景を説明する燕雨の話を考え合わせると、それはあたかも「画中の景」が実際に画として結晶されたものであるともいえる。すなわち、燕雨は「身の仕合せ」と言っている政吉との交際は、結果として彼に探し求めていた心の慰めともなる「画中の景」を与えているのである。

他方、政吉は燕雨の「清貧に案じ気骨稜々として毫も時流に阿る処のないのをば世に稀なるものとして尊んでいる」とあるが、政吉にとっても燕雨の存在はこれ以上にありがたいものだと言うべきである。お房との優雅な暮らしから「無上の幸福」を感受している政吉にとって、燕雨の目線、つまり政吉夫婦の「平和幸福」を羨ましく思い描いている燕雨の思い込みは、己の選択の正当性を裏付ける補助線のようなものでもある。すなわち燕雨との交際で、政吉は立身の道を捨てた後に歩み始めた隠居めいた暮らしを「画中の景」として意味づけ直すことができるのである。これで物語の結末部分に、政吉はまさにそうした「画中の景」のシンボルである「花瓶」の絵を手に入れることに対する喜びもうなずけるだろう。

要するに、燕雨と政吉は「互いに相方の人物を欽慕しその才識に敬伏し合つてゐる」が、相互の関係の背景にそれぞれの願望を垣間見ることもできるのである。しかし、このように政吉と燕雨の有様は描かれているものの、『花瓶』はこの二人の生き方を肯定し鼓吹するだけの作品ではないことを改めて特記しなければならない。お房の存在は右のような男主人公たちの生き方を相対化しているのである。「花瓶」の絵の前に、燕雨は長々と自分の作り上げた「傑作」の〈物語〉を述べているし、政吉は「花瓶」の絵に見とれて、燕雨の言っていることさえ聞いていないようである。そんな中、お房はただ「仏画でもみるやうに恭しくお辞儀をする」ばかりで、お佐喜の家出のことを「我が事のやうに」聞き出していることは、男たちの思い描く〈芸術的〉な世界と別の、より現実に近いオルタナティブを提供しているとも考えられる。お房の心配は、すでに崩壊の一途を辿っている燕雨家の状況だけによるものではない。お房は、我が家にも同じような崩壊の兆しを感じているのである。

お房の存在は政吉と燕雨の「画中の景」の裏側を覗かせる効果がある。政吉は自分の離れ座敷に引きこもって、優雅な

趣味に日々の暮らしを送っているが、「無上の幸福」としているその状況が実際に崩壊することをちらつかせているお房の悩みに全く関心を示していない。一方燕雨は「別離の悲劇」を「わが藝術の一大進歩」と考え、家出したお佐喜のことを放置し、むしろそれこそを待ち構えていたかのように「この調子で二三年描けなかつたのをつゞいて仕上げてしまいたい」などと述べている。燕雨は自分の心の慰みを、虚構の〈器〉に過ぎない「花瓶」の絵に求めていることは、彼すなわち燕雨もまた、現実より自分が作り上げた虚構の世界を重視していることを端的に表している。

政吉と燕雨は自分の幸福や心の慰めとなるようなものを、最終的に現実にではなく、自分たちが作りあげた虚構性を帯びた状況にこそ見出し、それを後置的に論理づけている。『花瓶』は特に男主人公がどのように幸福や安堵を感受しているかその過程を描きながらも、己の境遇を正当化しようとするそれぞれの有様を捉えている作品として新たに評価すべきである。

**注**

(1) 吉田精一『永井荷風』(新潮社、一九七一年)

(2) 坂上博一『腕くらべ』への道説」『永井荷風論考』(おうふう、二〇一〇年)

(3) 佐藤麻衣「大正期の永井荷風―「花瓶」をめぐって」(『小女子大学大学院日本文学紀要』第一九集、二〇〇八年)

(4) 中野真理「悲哀の色―永井荷風が描く男と女の情景―」(『アジア文化研究』三九、国際基督教大学、二〇一三年)

(5) 男たちの姿勢に荷風の批評性を見出す指摘は例えば中野の論考(前掲資料)にも見られる:「男たちは社会から距離を置くという態度をとり、芸術的空間の中に自身の生きる場所を見出した。その姿は諦めからくる一種の逃避とも見えるが、一方で、芸術の中に沈潜することで積極的に「美」の価値を発掘し、愚かな現実社会を踏み越えていこうとする荷風の断固とした姿勢が表れているとも言える」。

(6) 坂上(前掲資料):「政吉お房の夫婦は荷風八重女に性格なり、置かれた環境なりが似ている」。坂上はまた「この奔放な画家燕雨もまた荷風の一分身であることは、これまた定評のあることである」とも指摘している。なお、佐藤(前掲資料)の論考でも、特に荷風と燕雨の共通性が受け継がれている:「(引用者注―燕雨の画歴は、)作者自らの執筆活動を反映させているだけではなく、文芸界の流れを美術史に置き換えて、西洋と日本文化の対立と、そこから新しい方向性を生み出そうとした大正期における芸術の流れを描いている」。

(アブラル・バスィル/本学大学院博士後期課程)